

月刊

地域保健

3
2015

●座談会

東日本大震災の被災地における 心理的・社会的サポート

—4年後の今、起きていること、できること

●フロンランナー 土屋裕子さん 《横芝光町 健康管理課 健康管理班 班長》

●ピープル 滝脇 憲さん 《特定非営利活動法人自立支援センター ふるさとの会 常務理事》



6 座談会

東日本大震災の被災地における
心理的・社会的サポート

～4年後の今、起きていること、できること～

出席者

岩室紳也 (ヘルスプロモーション推進センター) =司会

沓沢はつ子 (石巻市健康部健康推進課)

洞口祐子 (釜石市地域包括支援センター)

山屋理恵 (社会的包摂サポートセンター)

大塚耕太郎 (岩手医科大学)

34 《解説》被災地の人と支援と地域をつなぐ

～24時間フリーダイヤル「よりそいホットライン」～

1 フロントランナー 土屋裕子さん (横芝光町 健康管理課 健康管理班 班長)

42 FOCUS ベビーカードダンスで「産後うつ」を解消

46 REPORT 1 「第3回日本公衆衛生看護学会学術集会」開催

52 REPORT 2 ミニ講演と対話の会 風を感じて—自閉症の僕が—のまに生きるために

56 特別寄稿 大規模広域災害発生時の精神科医療のニーズ

97 ひよこ、ホップ、ステップ、ジャンプ!

戸上葵絵さん (東近江市 八日市保健センター 健康福祉部健康推進課)

102 ピープル 滝脇 憲さん (特定非営利活動法人自立支援センターふるさとの会
常務理事、精神保健福祉士)

連載

(66) 保健師のための閑話ケア 《第51回》

藤本裕明

(70) 中臣さんの 環境衛生ウォッチング 《第36回》

中臣昌広

(75) いまどき子育てアドバイス 《第210回》

中川信子

5歳児健診導入で発達障害児支援に尽力

子育て環境を整え、若い人が安住できるまちづくりを

土屋裕子
さん

● 横芝光町 健康管理課 健康管理班 班長



横芝光町は、千葉県北東部の海に面した町。2006（平成18）年に山武郡横芝町と匝瑳郡光町が合併して発足した。このように違う郡に属していた町同士が合併するのは比較的珍しいケースらしい。土屋裕子さんは、そんな町の変遷とともに、住民たちの健康を長年にわたって見守り続けてきた。

県内でいち早く 5歳児健診を導入

銚子市生まれの土屋さん。千葉県の保健婦助産婦専門学院を卒業後、1985（昭和60）年に配属されたのが、匝瑳郡の光町役場だった。

当初は、保健師2人で、高齢者から子どもまでの支援に当たる多忙な毎日。その反面、住民と密着した関係が築け、職場の士気も高くて、とてもやりがいがあったという。

2006（平成18）年に光町と横芝町が合併したときには、多少とまどい

も覚えた。二つの町は、栗山川を境に隣り合っていて、面積も人口もほぼ同じ。海に面し、背後には山があるという自然環境も似通っていた。ただし、両者は明治時代まで上総国と下総国という別の地方行政区分に属していた歴史があった。だが、土屋さんは、「結果的には、人員が増えて事業がやりやすくなり、よかったと思う」と言う。

土屋さんは、町の合併以前から、発達障害児の支援に取り組んできた。

「母子保健の担当になり、乳幼児健診などを実施しているうちに、発達が気になる子どもが多いことが分かりました。そこで、親子で参加できる療育教室を04（平成16）年から始めています」

療育教室の目的は、子どもたちの発達の経過を観察し、保護者の相談にのることだった。乳幼児健診の段階では、発達障害と判断するのは非常に難しい。その後を絶えず見守っていく必要があると強く感じたのが開催の動機



だという。

療育教室を続けるうちに、関係機関の連携をもつとスムーズにし、小学校入学まで支援をつなげていくシステムが必要だと考えるようになった土屋さん。その機運は05（平成17）年におとずれた。「発達障害者支援法」が4月より施行されたのだ。

そうしたタイミングを逃さず、土屋さんは、5歳児健診の導入を立案し、合併後の07（平成19）年から、横芝光町では千葉県内でより早くから5歳児健診を実施するようになったのだ。

東日本大震災の 被災地における 心理的・社会的サポート

4年後の今、起きていること、できること

東日本大震災から4年。被災地では整地が進み、復興公営住宅への入居も始まった。一見落ち着きを取り戻しつつあるかに見えるが、潜在していた被災者の心の問題が表面化してきている。ひところ報道された、うつ、孤立死、アルコール問題に加え、虐待、DVなどの多問題ケースや精神保健福祉法第24条に基づく通報も増えている。

今月号では、現地で被災者支援に当たる方々に、被災地で生活する人たちの間に起きている心の問題を、地域社会の中でいかに支えていくかについて語り合ってもらった。



◆金石市地域包括支援センター

洞口祐子さん



◆石巻市健康部健康推進課

沓沢はつ子さん



司会

◆ヘルスアップロモーション推進センター

岩室紳也さん



◆岩手医科大学

大塚耕太郎さん



◆社会的包摂サポートセンター

山屋理恵さん





司会

ヘルスプロモーション推進センター長、医師

岩室紳也 さん

●いわむろ・しんや●

自治医科大学を卒業後、神奈川県内の病院、診療所、保健所、県庁等に22年間勤務。(公社)地域医療振興協会ヘルスプロモーション研究センター長を経て、2014年4月にヘルスプロモーション推進センター(オフィスいわむろ)を設立。千葉県浦安市いのちとこころの支援対策協議会会長、岩手県陸前高田市包括ケアアドバイザー、宮城県女川町健康づくりアドバイザーとして地域の元気づくりに取り組む。

岩室 きょうの座談会のテーマは「東日本大震災の被災地における心理的・社会的サポート」です。私は長い間、泌尿器科やHIV/AIDSの臨床を続ける傍ら、公衆衛生の考え方に学びつつHIV感染予防の啓発や性教育に関わってきました。その中で見えてきたのが、男の子どもたちが性に対して積極的でなくなった結果、10代の妊娠中絶も減ってきたことでした。これらの背景を探るうちに、実は表面的には心と関係ないように見える指標にも心の問題が影響しているのではないかと考えるようになりました。ところが、自殺対策では、うつ発症など、ハイリスクアプローチには焦点が当たっていて、うつにならない一次予防に向けたポピュレーションアプローチ、社会にまん延するリスクへのアプローチの議論はまだ十分とはいえませんでした。

そうした中で東日本大震災が起き、被災地における「心のケア」が叫ばれるようになりました。私自身は当初から個人ケアのイメージが強い「心のケア」という言葉だと「何か違うな」と思っていたのですが、日本WHO協会理事をされている大阪大学の中村安秀先生の「世界の潮流では、被災地の心の問題は心理的・社会的サポートという」という言葉に出合い、まさにそれだと腑に落ちました。

また、日本人は「これは医者の仕事、これは保健師の仕事」と専門を区分けしたがりますが、被災地では専門職も含め、いろいろな人が重層的に関わる必要があります。「専門職とは何？」と考えました。今の私が組織を離れ、個人事務所で活動しているのも、被災地では組織や専門職という既成の役割を越えた働きが求められるからです。

前置きが長くなりましたが、被災地の問題、特に心の問題を考えるとき、

専門的なアプローチやハイリスクアプローチの重要性は否定されませんが、それだけでは限界があるということに最初に申し上げたからです。というわけで、きょうの座談会はゴールを設けません。「被災地の社会的心理的サポートはこうあるべき」という結論よりも、被災地での試行錯誤を共有する中でさまざまなものが見えてくる、いいなと思っています。

震災から4年近くたった今、それぞれの方が何を感じ、何を問題とおられるのかを最初にお話しただけだと思います。

震災前からの問題が顕在化

沓沢 石巻市健康推進課の沓沢です。今、石巻市で起きている問題は、震災前から潜在化していたものが、震災によってより深刻化しているのではないかと思います。

10年以上も前のことですが、介護保険のスタートに当たって2年間、介護保険の部署にいた私が、健康推進課に戻ったときに真っ先に感じたのは、児童虐待や自殺の問題など精神面のフォローを要するケースが目立って増えて

いることでした。2年の間に世の中が変わってしまったように感じました。「子どもを泣かせたら隣の人に虐待だと思われるから、泣かせられない」という相談が日常的に入ってきたり、アルコール問題や統合失調症の相談が頻

繁に入ってきたり、それまでは珍しかったDVのケースが出てきたりで、私にとって衝撃的でした。「家族の中で何かが起きている。問題を深く捉えないと解決できないだろう」と考えながら、精神保健に携わっていました。



住民のみなさんとの 距離の近さが魅力

細やかな気配りのできる保健師を目指して

とう え き え
戸上葵絵さん

● 東近江市
八日市保健センター
健康福祉部健康推進課



文＝太田美由紀（ライター） 写真＝ C.Kent

滋賀県の南東部に当たる東近江市は鈴鹿山脈や琵琶湖に接し、のんびりとした田園風景が広がっている。

戸上葵絵さんは大学を卒業後、東近江市の保健師となり、1年目から母子保健を主に担当。この春で2年を迎えようとしている。取材に訪れた日は、集団健診の受診者に個別で結果を返却する事業があり、戸上さんもその準備に追われていた。おそろいのウインドブレーカーを着て準備を進めていた八日市保健センターの皆さんも、その手を止め、笑顔で迎えてくれた。

母の働く保健センターが 自分にとって遊び場だった

「この八日市保健センターに勤務している保健師は、先ほど集合写真を撮影した、私を含む6人です。私が一番の新人なのですが、みなさん本当に相談しやすい先輩で、『分からんことはなんでも聞いて』と声を掛けてくれるの

で、とても安心して働いています」と戸上さんは笑う。

戸上さんは九州の大分県で生まれ育ち、高校卒業後に滋賀県内の近江八幡市立看護専門学校に進学。看護師免許を取得後は、滋賀県立大学人間看護学部に進学し、保健師免許を取得した。その後、大分に帰ることなく、東近江市の保健師になることを選んだ。

「大分には帰らないのかと、大学編入時にも、就職活動時にも担当の方に必ず質問されました。両親からも、節目節目に『帰ってこないのか』と電話がありました。でも、看護学校で友だちもたくさんできましたし、一人での生活にもせつかく慣れて来たのでこちらで頑張ろうと決心していました。実家を出て知らない土地に来たからこそ、生活も勉強も頑張れたような気がします。実家だったら、甘えてしまっていたかもしれません」

近江八幡市の看護学校に進学したの



▲東近江市八日市保健センターの保健師は6人。ピンクの上着は完成したばかり

は高校の恩師の進めでもあったが、戸上さんの母は、看護学校から大学に編入して保健師になったという経緯もあり、戸上さん自身も、「大学に進学して保健師になりたい」という気持ち

生活困窮者に最も必要なのは、孤立しない環境

仲間、居場所、社会的役割をつくる



特定非営利活動法人
自立支援センターふるさと会 常務理事、
精神保健福祉士

滝脇 憲さん

● 聞き手 編集部



バブル経済の崩壊とともに高齢者ホームレスの問題が深刻化した東京の山谷地域で、生活困窮者の自立支援を行う*1「ふるさと会」。その中心メンバーとして事業を行う滝脇憲さんは、274人の職員とともに、生活困窮者の悲哀や孤独と向き合いながら居住支援や就労支援に奔走している。滝脇さんのこれまでの取り組みや今後の目標、事業への思いなどについて伺った。

ホームレス支援には 精神保健の視点が大切

— 学生時代から、生活困窮者の自立支援をしたいと考えていたのですか？

滝脇 大学入学時までは全く考えていませんでしたが、先輩に誘われて始めた精神科病院での看護助手のアルバイトがきっかけで、今日に至っています。

その病院には週1、2回、当直の間帯に行っていて、患者さんが暴れたときなどに医師の指示に従って対応するのが仕事でした。何も起こらなければ、喫煙所で患者さんずっと雑談していましたが、皆さんが抱えていることを知りました。口を揃えて話すのは「家に帰りたい」ということです。僕はアルバイトが終わったら鉄格子の扉を開けて帰るわけですが、皆さんに「また来週、さようなら」と言うときの、後味の悪さみたいなものをずっと感じていました。

大学では哲学を専攻していましたが、精神や身体に障害を持つ人に関わるアルバイトばかりしているうちに、精神保健に関心を持ち、精神障害者の

PROFILE

● たきわき・けん ●

1972年生まれ。2002年特定非営利活動法人自立支援センターふるさと会に入職。2003年精神保健福祉士資格登録。現在、同法人の常務理事、都市型軽費老人ホームルミエールふるさと施設長を務める。東京外国語大学外国語学部非常勤講師（社会学）、一般財団法人高齢者住宅財団「低所得の高齢者等への住まい・生活支援を行う事業の全国展開に関する調査研究事業」委員、厚生労働省「生活保護受給者の健康管理の在り方に関する研究会」委員。

*1 ホームレスを支援するボランティアサークルとして1990（平成2）年に発足し、1999（平成11）年に法人格を取得。生活困窮者が、地域の中で住居を持ち安定した生活を送り、社会の中での役割や人としての尊厳、居場所を回復するための支援を事業として展開。台東区、山谷地域から始まった支援活動は、現在では墨田区、新宿区、荒川区、豊島区、世田谷区に広まっている。さまざまな事情でふるさとに帰れない日雇いの労働者たちが、仲間とともに故郷の鍋を囲みだんらんすることで元気をだすというという、発足当初の活動内容が名称の由来。